

## 6. 地域間連携による地域課題解決能力の強化について～松本市中心市街地の事例から～

松本市地域づくりインターン第4期生・中心市街地担当 正木 輝

### 1-1 研究の背景

今日、町会や地区の課題解決能力の低下が目立ってきている。その要因としては1つに、地域における課題解決の機能が弱まっていることが挙げられる。地域では、町会行事や地域課題に対して取り組める人が減少し、そのメンバーも固定化されており、地区や町会での課題解決が困難な状況になっている。2つめとして挙げられるのは、公的な機関が複雑化する地域課題に対して、柔軟な対応を行うことが難しくなっていることが挙げられる。公的機関は、公平性や平等性を重視するため、細分化される地域課題に対応することができない。

これらの要因があり、地域内においての住民による課題解決能力が弱体化することで、地域において次のような課題が出てくると考えられる。

#### (1) 高齢化・人口流出による地区・町会の弱体化

国民生活白書によれば、地域の暮らしにあったニーズの支援や解決は、その地域に住む住民でないと担えないことが多いとしている。特に暮らしの支援などは人と人との密接なかかわりが重要とされており、身近なところで継続的に支援を得られることが求められる。こうした関係づくりは暮らしの支援にとどまらず、災害などの有事の際にすぐ駆けつけて助けることができることにつながる。身近な地域の住民活動があることで暮らしの中のニーズに対して、自ら解決を目指し、きめ細かなサービスや支援を提供できるよう取り組むことができる。この身近なところとして位置づくりが松本市では地区や町会である。

しかし、高齢化や少子化の影響により、地域内において課題解決に動ける住民が減少している。地域の中から、地域課題や暮らしのニーズに対しての解決を求める声が上がっていても、早急な対応や住民による継続的なサポートを行うことができずにいる。

#### (2) 関係の希薄化による課題解決の困難

一方で、松本市の中心市街地である第二地区や第三地区は新興住宅地やマンションを保有している町会がある。こうした地区や町会は人口が多く、人口だけ見れば課題解決に取り組むポテンシャルがあるといえる。しかし、集合住宅地ほど、近所付き合いの割合が低く、20.8% (H16) と商業地域などの他の地域と比べると最も低く、関係性が希薄化しつつある。こうしたことから、暮らしの中の困りごとに対しても近隣へお願いすることができない状態となってしまう。活動の参加者が少なく、地域課題の解決や困っている人へのサポートが困難な状態となっている。

集合住宅地に多く住んでいる住民のほとんどが、地域活動に対し「今後は参加していきたい」といった前向きな声もある一方で、「時間がなく参加ができないといった」と回答している。

#### (3) 祭礼を通じた地域の現状

平篤志氏(筑波大学大学院)は自身の論文の中で「人口の流失は町内会を初めとする地域的な活動を不活発にし、祭礼に代表される文化的行事の実施を困難にしている。」と記述している。人口が減少し担い手がいなくなってしまうと、祭礼などは執り行われず、文化が衰退していつてしまう。また、住宅地などの人口が多く、祭事に対して大勢の参加が期待できる地域もある。しかし、住宅地では移住者が多く、祭礼に対して関心がなく習慣的に参加している人が多い。こうした習慣的な参加や執り行いが年々、煩わしいと感じる人が増加し、参加者が減少している。しかしながら、全国的にみるとこうした地域の文化的行事の執り行いを巡り様々な取り組みが行われている。

東京都千代田区の神田明神・三崎神社の例祭では、町会の規模が小さく神輿の担ぎ手が少ないところや祭礼に要する費用が少ない町会同士が共同し祭礼を執り行っている。また、地区によっては祭り愛好家などの外部団体を参加させている町会もあるが、それらはあくまで、大きな祭りであ

り、地区町会単位の小さな祭礼には外部団体の参加は見込めない。

そこで本研究では、人口流失や高齢化、関係の希薄化などにより身近な地域での課題を解決できない弱小町会や住民活動組織が地域課題の解決に向けて互いに連携を取りあうまでの仕組みづくりを検討する。

地域課題の解決は身近な地域である地区、町会での個別解決が求められている。しかし、地区内の参加者不足や町会の人口減少などにより、個別解決が困難な地区や町会がいくつもみられている。こうした小さな地区、町会が祭礼の際にみられるような枠組みを超えた共同や連携を生み出し、地域課題に対する課題解決能力の強化を目指していく。祭礼の際には担い手不足や資金不足といった問題が共通していた。高齢化や担い手不足などにより発生する地域課題は町会で共通しているものが多い。この共通した地域課題に対して複数地区で連携し、取り組むことができれば、個別解決が求められている中で、新たな解決方法のモデルとして確立させることができるのではないかと考える。

## 1-2 地区の現状

松本市の中心市街地は松本城を中心とした観光地や商業地の面と住民が暮らす生活圏の面を併せ持った5つの地区によって構成されている。また、中心市街地では松本城を背景とした城下町の歴史や戦後の産業集積地の関係から、地区間、町会間にも意識や考えに差がみられる。

こうしたことから中心市街地を構成する地区町会ごとには人口や考えに大きな差があり、人々の暮らしのニーズや地域課題も、人口の規模や立地によって大きく異なっている。しかし、その町会単位での地域課題やニーズを探ると共通していることが多くみられる。例えば、これらの中心市街地に共通する課題は、買い物環境がないといったことや地域行事の担い手不足など、暮らしに関わるものから祭礼などの地域行事に関わるものまで多様である。

こうした地域課題に対して人口減少や高齢化などにより、単一での解決能力が乏しい町会も出てきており、地域の課題については認識しているが、解決に向けて動き出せずにいる状態が続いている。一方では、課題解決に向けて動き出している町会もみられるが、取り組みの進度に違いがあり、地

域の状況や取り組みが共有されておらず、共通している地域課題に対して別々のアプローチで取り組んでいる状態がみられる。

こうした状況を打開するために、課題解決に向けて動き出せずにいる町会同士を結びつけ、連携を取りながら課題解決に向けて動き出すことができないかを検討する。多様な地域課題の中からすでに活動に向けて取り組んでいる町会、これから動き出したい町会、動き出せずにいる町会同士を結びつけ、地域課題ごとによる横断的な取り組みの創出を目指す。

## 1-3 研究方法

今回は、地域間連携による新たな地域課題の解決能力の強化に向けて動き出すためには段階的なアプローチが必要であると考え、調査研究を行っていく。地域間連携に向けたステップとして下記の3つの段階を設定し、実証実験を通して、それぞれの局面において、それらを現実化する条件とは何かを明らかにしていくこととする。

### 第1ステップ：共通の話題をキッカケにした交流の創出

地域課題の中には共通するものも多くあり、共通する課題を抱えた町会や地区同士が連携を図れば解決に向けて動き出せそうなものもある。しかし、互いの現状を把握する場がないため、双方が歩み寄ることがないままに共通の地域課題に頭を抱えている状態がある。

そのため、第1ステップにおいては、まずは地区間に互いの状況を知ることのできる交流の場の創出を目的とする。しかし、地区間においては様々なしがらみを抱えているものもある。様々なしがらみに縛られない新たな交流を生み出すために、興味関心の高い話題を題材とした交流の機会を作り、地域の連携に向けたキッカケであるつながりを生み出していくことが必要であろう。丁寧につなかりを作ることで課題解決を目的としたものだけではなく強固なつながりができると考えている。こうしたつながりの中から互いの課題を認識して解決に向けて動き出せるような場を設けていくことが共同による地域課題の解決に向けたアプローチにつながるのではないかと考える。

### 第2ステップ：課題把握・共通性の認識形成

地域課題に対しては、身近な町会単位での解決

が求められている。しかし、世帯数が少なく、高齢化などが深刻となっている町会では人員不足や金銭的にも課題解決能力が弱く、課題解決に対して単一の町会では取り組めない状態にある。その一方で、地区内においては同じ地域課題を抱えている境遇の町会がある。これらの課題に対して共通認識を持った町会同士が連携を図ることで、単一の町会では行えなかった課題解決に取り組むことが可能ではないか。

そこで、どのようにすれば地域課題を共有し、地区を越えて共通する課題を抱えている町会同士のつながりが生み出せるか。そして共同して課題解決に取り組んでいくことができるのかを明らかにしていく。

### 第3ステップ：情報の共有（課題解決に向けた土台作り）

一方で、地区内において課題解決に向けた取り組みに町会ごと進捗の違いがあり、それぞれが独自の方法で解決に向けて動き出している。こうした先進的な取り組みは、地域課題を抱えている町会からは関心が高く、参考にしていきたいとの声もある。しかし、互いの地区や町会の現状が共有させていないため、関心の高い先進的な取り組みが地区内に広まっていない。

そこで、互いの地域のことを共有する場を持ち、先進的な取り組みを行っている地域とその取り組みを参考にしたいと考えている地域とのマッチングを行う。そのことを通して、先進的な取り組みが地区内に共有され、各々の地区や町会にあった形で普及させていくことで、地域に定着し新たな地域課題の解決策として地区内に共有させていくことができるのかを明らかにする。

これらの3つの段階を踏みながら、徐々に丁寧な関係をつくりあげていくことで、簡単には切れることのない強固なつながりとなり、継続性や連帯感を持った地域課題の解決が期待できると考察する。

## 2 実証研究

地域づくりインターンとして、中心市街地を中心とした複数地区での取り組みを行うにあたって、まずはそれぞれの地区や町会の活動や会議に参加し、その中で地区を横断的につなげる仕組みづくりが重要ではないかと考えた。城下町であるため、

通りや川を挟んだだけで地区が変わってしまう状況であるが、地域課題は地区や町会のみで起こるものではなく、その周辺エリア全域で起こる。その一例として挙げると、スーパーマーケットなどの買い物の場がなくなった場合、そのスーパーマーケットの購買エリアすべてが買い物環境の消失という地域課題に直面し、その地域課題が該当する対象には地区や町会といった枠組みがないといった具合である。

こうした中心市街地における地域課題の発生に手をこまねいている状態の地区、町会同士を結びつけるために「1-3」で論じた段階的なアプローチを元の実証を行った。

### 2-1 共通の話題をキッカケとした交流の創出

#### (1) 昭和の松本を語る会

##### ① 活動経緯

これまで中央地区では地域包括ケアシステムを構築していく上で必要となってくる「多様な場づくり」を推進してきた。こうした中でサロンは高齢者が自由に集まる場として開催されている。サロンでは暮らしのことや、自身の身の回りのことなどの様々な話が挙げられている。こうした中、最近サロンで話によく上がるのが町並みの変化である。中央地区はまちなみの変化が激しい地区である。松本城南西総堀復元事業を中心に、基幹博物館の移設やそれに伴う大名町の再開発など、多くの市民から愛させてきた建物やまちなみに変化しつつある。こうした思い出深いまちなみに変化していく様子をさみしいと感じている地域住民も多い。

そうした中で、松本大学『向井ゼミ』と『支援会ゆにまる』が松本市商工会議所に保管されていた写真を活用した事業に取り組むこととなった。松本商工会議所では創立100周年記念の際に作成した「松本市まちなみ写真パネル」が保管されており、かつての中心市街地の風景も記録されている。これらの写真パネルを活用し、変わりつつある町並みの当時の姿を自由に語り合ってもらうことで「多様な場づくり」につながると考えた。それだけでなく、松本大学の学生たちにとっても高齢者の人たちからの聞き取りを通して新しい地域資源の発見につながるのではないかとということから、中央地区と松本大学の二者が連携を取り、写真パネルを見あいながら語り合う「昭和の松本を語る会」がスタートした。

## ② 実証内容 〈昭和を語る会〉

「昭和を語る会」で使用される写真としては、実際に話を聞く高齢者の年代に合わせて昭和初期～平成初期までのものを選択し、当時を生きた人たちが誰もが見たことのある懐かしい風景を中心に選び、その写真を見合って語り合う「昭和を語る会」を4回開催した。参加者の方からは松本駅舎の写真を見て、自身の学生時代のころの話や当時のまちなみの様子などを聞くことができた。参加者の中には80代後半の方も参加してくださり、戦時中から終戦、戦後復興に至るまでの松本のまちなみを自身が体験し、感じたままに話してもらうことができた。実際にそのまちで暮らしていた高齢者の話を聞くことで写真の年代の時代背景や、変化していくまちの中での思い出を聞き取ることができた。写真一枚が引き金となり、当時のまちなみや遊び、生活や買い物などの様々な話を高齢者から聞き取ることができた。これは「地域回想法」に似た取り組みであり、写真などの史料を見ながら昔を思い出すことが認知症予防にもつながることが期待できる。

当時の松本を象徴するような懐かしいと思える歴史や風景が松本市には多く遺されている。特に中心市街地は産業の中心地といったこともあり市役所や松本城、チンチン電車などまちの歴史を語る上では欠かせないものが数多く集積している。

さらには、地域の高齢者の話は参加していた学生たち若い世代にも大きな関心を引き起こし、松本のまちに対する新たな知見を得ることができたのではないかと考える。

〈二ノ丸町会同窓会〉 平成30年11月14日、平成31年1月11日 開催

現在、松本城南西に位置している二ノ丸町会は「松本城南西総堀復元事業」による用地買収が進められており、多くの住民が住み慣れた町会から立ち退かなければならない事態が生じている。こうした中、二ノ丸町会から立ち退いた住民の方から、「昔一緒にいた人たちともう一度行き会って話をしたい」といった要望が出された。そこで二ノ丸町会から立ち退いた住民の方々を集め同窓会を行うこととなった。この同窓会の一環として「昭和を語る会」を開催した。この会では、松本大学の学生からは写真パネルをスライドショーに編集し、映像作品として上映した。映像を見ながら参

加した二ノ丸町会の方からは「懐かしい」といった声が多く聞かれた。前回開催した際は写真パネルを並べ、展示会のような会場を作り写真を見てもらったが、今回は映像化しスライドショーとして上映したため、一枚の写真を全員で楽しむことができ、映像に合わせた音楽を口ずさんでいる参加者も見られた。聞き取りでは高齢者一人に対して、学生が数人ついて話を聞き取るスタイルを取った。高齢者の方同士で話が盛り上がる一方では、学生に自身が暮らしたまちの様子を楽しそうに教えている姿が見られた。今回、高齢者の輪の中に学生が入り、対話をしながら当時の話を聞き取ることで高齢者と学生との距離がかなり近づいたと感じている。



参加した高齢者の方からは、「今度は桜の時期にお花見を兼ねてやりたい」といった声が出された。そして第3回目をやるときにも、ぜひ学生に参加していただきたいとの要望もあった。以前、第1回目を開催した際に、「2回目として新年会をやりたいが迷惑をかけてしまうから」と開催を望んでいる一方で消極的な姿勢であった。しかし、3回目の開催は消極的な姿勢はなく、ぜひやりた



いといった声が多くあがり、久しい友人と会い、学生などの若い世代との交流をととても楽しいものだと感じてもらえたように見える。一方では同窓会に参加できなかった友人を心配する声もあがり、どうしたら来てもらえるか、こちらから会いに行くかなどを考えており、今後も一緒に考えていきたいと思う。

〈たのしや上土、セントラルビオスでの開催〉 12月7日

中央地区内には「たのしや上土」や「セントラルビオス」などの高齢者福祉施設があり、これらの施設との共催事業として昭和を語る会が開催された。昔の写真や映像などを見ながら当時のことを思い返し語り合うことは「地域回想法」という認知症予防の1つとして注目されており、その一環として老人ホームの高齢者を対象に開催した。「たのしや上土」では地域の方と利用者との交流を行いたいとかねてより構想があり、この事業が開催された。そのため、当日の開催にはたのしや上土の周辺町会の住民が参加してくださり、地域交流を目的としても開催された。

当初、懸念事項として挙げられていたのが、老人ホームの利用者は松本市全域から来ており、郊外の地区から来ている利用者もいることから、全員が懐かしいと感じるか見当がつかなかった。しかし、当日の開催では写真はわからずとも、BGMの音楽や写真と同じ年代のころの自分の郷土の話など、様々な内容を聞き取ることができた。写真についての話題も多く出された一方で、写真から関連づいた昔の生活や娯楽、祭礼などの話を誰もが一樣に懐かしいと語り合っていた。こうしたことから、写真はあくまで話を引き出すためのツールであり高齢者の方が一番によく語るのは写真と同年代の生活やその時代のことであったことが分かった。

施設職員の方によれば、高齢者の方たちは普段は見せない表情をしており、目を輝かせていたとのことである。施設でもレクリエーションを企画して行うことはあるが、レクリエーションなどでは高齢者が受け身の姿勢となってしまう、やらされ感を感じて眠ってしまう方もあるという。しかし、今回のように高齢者が自身の話を学生や他の方へ発信するような形であると、自身の楽しかった思い出や昔の話を楽しそうに話してくれる。高齢者自身が発信する側となる交流こそが、昭和を

語る会の最大の利点ではないかと考える。

### ③ 考察

今回は、「松本市の歴史」を題材として新たな交流の創出を目指してきた。その成果として、高齢者と学生がつながるきっかけになった。

高齢者は自身の思い出を懐かしみながら話し、学生は高齢者から教えてもらう当時のまちなみや生活に興味を抱きながら話を聞いていた。こちらから一方的に情報を伝え、それについて話し合ってもらう形ではなく、あくまで話題やキッカケを投げかけ、後は自由に語り合ってもらう場をして開催したことで双方にやらされ感や負担がなく、楽しめてもらうことができたのではないかと。年代や出身地が異なる高齢者と学生の両者間に歴史という話題を投げかけたことで新たな交流やつながりがうまれた。

歴史を題材とした交流を通して、世代を越えた新しいつながりが生まれた。こうして構築されたつながりによって、日常的に交流の場が持たれるようになれば、歴史の話だけではなく地域の話や生活の話が広げられ、情報の共有につながると考えている。いきなり相手と情報交換や現状把握をしたりするのではなく、まずは交流を通して確かな関係性を生み出すことが地域の連携に必要なことであると考え。確かな関係性を生み出すためにも、まずは年代や出身を問わず、誰もが楽しみながら参加できる交流の場を提供することが求められている。

## 2-2 課題把握、共通性の認識形成

### (1) 松本神社ようこくあさ市

#### ① 活動経緯

中心市街地の地域課題として多くの人が挙げたのが、買い物環境の少なさであった。特に松本城を中心とした中央地区では地区内に生鮮品を取り扱うスーパーマーケットが存在しない。そのため遠方の大型商業施設まで行くために交通量の多い交差点を渡らざるをえないでいる高齢者が多い現状があった。その中で、「中央地区福祉互助会」では高齢者を対象とした送迎付きの買い物外出支援を企画し、3回にわたり周知をした。しかし、希望者が集まらず送迎付き買い物か移出支援は実施に至ることはなかった。希望者が集まらなかった原因を福祉互助会の隊員会議の中で協議すると、「買い物に同行してもらうには敷居が高いと

感じる」「買い物時間が制限されてしまうのが嫌」などではないかとの意見が出された。また、利用者としての立場から考えると「自分が買い物しているところを付きっきりで見られるのは嫌だ」といった意見も出された。買い物支援を行いたい、希望者が集まらず、1回に連れていける定員にも限りがあるなど、買い物外出支援には多くの課題があった。

こうした中、「買い物外出より市の開催のほうが買い物困難者のニーズに合致するのではないか」との共通認識が一部の住民の中から生まれた。買い物に行きたいが外出支援を頼むほどではないちょっとしたニーズに対応できる点や、定員数に規定がなく誰でも自由に利用できる点などの利点があることから、買い物支援市の開催は実現の可能性が高いものであると考えられた。さらには「買い物環境がない」という地域課題は一町会に限定されるのではなく、その近隣の町会が共通して持っている地域課題である。野菜市は1つ拠点を設け開催することで、近隣の複数町会に対して支援を行うことが可能である。町会が共通して持っている課題を互いに把握し合い、解決に向けた共同認識を持つことで買い物支援市の共同開催などにつながった。今回の事例でいえば、中央地区服地互助会の役員会議の場が、「買い物環境が周辺にない」という課題を共通に抱える4町会(中央地区の鷹匠町、丸ノ内、大柳町、城北地区の北馬場)における共通認識をはぐくむ場となった。

## ② 実証内容

4町会合同の買い物支援市は松本城の北側に位置する、松本神社を会場として開催された。松本神社を開催地とした狙いには4町会の中心地点にあることのほかに、神社という環境を利用することで、誰もが立ち寄りやすいオープンなスペースづくりにつながると考えたからである。こうしたオープンなスペースで行うことで、野菜市の目的の1つである、「高齢者を主体としたふれあいの一助」につながると考えた。朝市の名称に関しても利用者に親しみをもってもらえるよう、松本神社にゆかりのある「陽谷様」の名前にちなんでつけられたものである。オープンな場としたり、親しみを持ちやすい名称としたりすることで、地域住民に愛着を持ってもらい、生活の中の1つとなって地域に定着するよう心掛けて立ち上げた。

松本神社ようこく朝市は毎月第四日曜日の定期

開催とし、6月24日の第1回目から11月25日までの合計6回開催した。農産品を提供してくださった農家に関しては以前より中央地区との交流があった今井地区の「深山農業塾」と四賀地区「しののめの道バサール」の二者に協力をいただいた。また、その他生鮮品として「会田養鶏」から卵を出品していただいた。

今井地区の「深山農業塾」では、道の駅に商品を卸しているが、道の駅での販売だと売り上げから何割かが場所代として取られてしまうとのことである。そのため、場所代などの協力金がかからないようこくあさ市への協力は喜んで乗り出してもらえた。また、出店して地区の方と交流や、市への出店の帰りにみんなで食事に行くなどの楽しみを持ちながら、野菜市へ協力してもらっていた。

四賀地区では以前より、中央地区福祉互助会の立ち上げに対して、アドバイスをもらうなどの交流があった。今回はそのつながりを活かして、ようこくあさ市への出店に協力してもらうこととなった。「しののめの道バサール」も「深山農業塾」と同じように、地域住民との交流や、自身の作った農産品の発信などを楽しみとして協力してもらっている。

この買物支援市では、休憩所の設置と、商品の配達サービスを行った。休憩所については買物にきた利用者同士の交流を目的として設置した。結果として、回を重ねるごとに休憩所の利用者数が増加傾向にあり、住民間でふれあいの場として休憩所が大きな役割を果たせていったと感じる。また、休憩所では協力農家が季節の農産品を試食として提供してくださり、利用者同士の交流だけではなく、協力農家と利用者の間でも新たな交流が生まれていた。こうした広域的な地域のつながりが生まれていくことで、地区間の連携はもちろん、農家と利用者という個人間でのつながりも生まれていた。旬の野菜の調理方法やそれぞれの地区やまちの様子などを話題に世間話的な交流をしたことで、利用者にとっては新たな「友人づくり」に似た感覚でふれあいができたと考える。

配達サービスでは「手ぶらで来て、手ぶらで帰れる市」を目的として行うことにしたサービスであり、商品を購入したいが持ち帰るには重いため、遠慮してしまう人がいるのではないかとという声がよくこく市の実行委員の中から挙がり実現したものである。さらには持ち帰りを心配することなく買い物するためにリヤカーを使った配達の支援の



実現につながった。当初、この配達サービスは筆者を含む、ようこくあさ市実行委員の数名で行っていた。しかし、回を重ねると、「帰路が同じ方向だから」と余力のある利用者が持ち帰るのが大変な利用者の荷物を一緒に運んでいたりと、町会のボランティアの方が参加してくれるようになったりと、実行委員が配達を行わなくとも利用者間での支援がみられるようになった。こうした利用者間での支援が生まれることで、買物支援だけではなく日常的な生活支援を行える関係が生まれつつあると感じた。

### ③ 考察

この松本神社ようこくあさ市は住民の多くが周辺町会から買い物の拠点として重宝されている。現在、開始当時に対象としていた4町会のほかにも、その周辺町会である新田町、宮崎町、西堀町などからも来客がみられ、地域の中の1つの買物問題解決の場として注目されている。これらの町会は4町会の町会長方や利用者が同じ境遇にある近隣町会にもあさ市を紹介するなどの取り組みによって広まってきた。利用者にアンケートを取ると、人から紹介されて市に来たという方も一定

数存在していた。こうした動きは「買い物環境がない」とした自身の課題は近隣の他の住民の課題でもあるという共通認識が生まれつつある結果ではないか。



一方で、取り組みを通して新たな課題や利用者からのニーズや支援を求める声が出ている。こうした個々人が抱える課題に対して、どのようにして「全員で解決していく課題」だという共通認識を持たせるかが重要になってくるのではないか。個々人の課題を地域の中の共通している課題としてとらえることで、「だれかやってくれる」「自分には関係がない」などの考えではなくなり、「支援していかなければ」という考えにつながっていくと考えている。

「自身の町会がこのような状況だから、周辺の町会も同じ状況なのでは」という考えから、周辺町会にも声を掛け、それぞれの町会の状況を把握し、同じ地域課題であるという認識を形成していった結果、買い物支援市の開催になった。自分たちで解決しようと連携とり、立ち上がった活動であるため、互いに負担をカバーし合い継続性をもって取り組むことができる活動になっていると感じ

ている。

### 2-3 情報の共有(課題解決に向けた土台作り)

地域課題は地区柄や町会の構成などにより共通するものが多い。こうした地域課題に対して、それぞれの地区や町会が独自の解決アプローチを行っている。しかし、その独自の方法が地区や町会間で共有されることがなく、解決に向けた動きがわからず、課題解決に取り組めずにいる地区や町会がみられる。

そこで、今回は『第34回公民館研究集会』にて、地域の祭礼などの伝統行事の執り行いに対する地域課題や先進的な取り組みを情報共有する場を設けた。

#### ① 活動経緯

公民館研究集会の分科会では様々な立場の人が集まり、地域課題やそれぞれのテーマに沿った内容を協議する会である。今回はこうした立場や役職を超えた人たちが集う場にて、地域行事の執り行いについて協議する場を設けた。当初は地域の建物や遺構などの歴史文化を保存する方法について協議する方向性で議論されていた。しかし、町会関係者やPTAの方から、「歴史文化の保存ということで町会の祭礼などを行うが、その執り行いが困難になっている」という現状を聞いた。

こうした話を受け、最も身近に行われている歴史文化の保存である地域の祭礼などの執り行いについて、それぞれの立場がそのような状況で対してどのような取り組みを行っているのかを情報交換をする場とすることとした。

#### ② 実証内容

今回、地域の祭礼の執り行いや歴史文化の継承がなぜ困難なものになってしまったのかをPTAや教員などの学校関係者、育成会や町会長などの地域住民、文化財課や公民館などの立場から考えた結果、以下のような要因が考えられることが分かった。

PTAや町会関係者からは、参加者が集まらないことが最も大きな要因であると指摘された。町会人口が少ないことや、町会内に子どもが少ないことで参加者が集まらず行事を執り行うことができない状態が多く見られることがわかった。しかし一方では、町会の人口が多く子どもたちも多く住んでいる町会では、移住者が多いため地域の伝

統的な祭礼に対して思い入れがなく、興味関心も持つことがないため参加しない人が多いという現状があった。こうした要因から参加者や協力者が集まらず、PTAなどの関係者は祭礼の執り行いに苦勞している。

また、祭礼の執り行いのやり方がわからずにそのまま取り止めになってしまうこともあるという。地域住民の中にいる詳しい人たちから執り行い方を聞きたいと考えているが、PTAと町会とのつながりがなく地域の方に話を教わることができずにいる現状があった。

一方では学校関係者からは、学校で地域のことを学ぶことがないとした要因が挙げられた。先生方も転勤で配属されて地区にやってくる方が多く、地域の歴史や文化が大切であることを学ばせたいと考えていても、先生方が地区のことがわからず教えることができない状態がある。地域のことを学習したいと考えていても、地域とのつながりが薄く、地域の歴史などに詳しい人が把握できずに学ぶ機会を設けることができていない。

これらの課題発生の要因の解決に向けてどのように取り組んでいけばいいのか、複数回の話し合いの場を持ち、公民館研究集会当日に向けての協議を行ってきた。

当日はPTAの方や学校関係者、公民館長や松本市内で歴史文化の保存活動を行っている方が中心に集まった。それぞれの立場から地域の歴史文化の保存についての現状を共有し合った。分科会には新たな参加者が多く見られた。これらの新たな人の参加が見られたことで、多くの人がこの地域課題に対して問題意識を抱えていることがわかった。歴史文化の保存に向けての取り組みが紹介され、それぞれの現状が共有される中で、学校と公民館が密な連携を図っている取り組みや、次の世代に引き継いでいくために祭事の記録を多様な媒体を使って保存をしている事例などがあげられた。これらの事例は住民たちによる取り組みで成り立っているものが多く、それぞれが自身の地区に持ち帰り、活かしていけるような取り組みの共有がなされた。

#### ③ 考察

今回の公民館研究集会では、「歴史文化を次世代に伝えていくために」という共通の地域課題についての情報の共有を行った。先進事例や実践などの情報を共有する場とし、課題を抱えた当事者

やその課題に対する様々な立場の人が集まった。

先進事例や実践を共有することで、課題を抱えていた人たちへ課題解決のヒントを与える場として、また、取り組んでいる人たちからは新たな知見を得る場として大きな役割を果たすことができたと感じている。地区や町会を越えた共通の課題であると、それぞれが自身の地域にあった独自のアプローチをとっている。こうして共有された情報の中から自身の地域にあったものを選び出し、地域へ定着させていくことで、また新たな実践へとつながることになるのではないか。

また、今回の情報共有の場では先進事例の取り組みだけではなく、地域課題に対して当事者を含む、それぞれの立場からの境遇や現状を共有する場となった。それぞれの立場の本音や取り組みを共有する場は従来まであまりなく、共通する地域課題に対して各方面がそれぞれに対応策を考えていたり、取り組みを行っていたりとすれ違うことが多かった。自身の情報を共有したことで、互いの境遇を知り、課題解決に向けて各方面がつながりあい、共同で課題解決に取り組んでいこうという意識が芽生えたと考えている。

先進事例や実践の情報を共有することで、課題解決に向けたヒントを得ることができるが、まずは地域課題に対する様々な関係者の考えや現状などの情報を共有し、共通認識を持たせる場が重要ではないだろうか。

### 3 まとめ

本論文では、地域間での「連携」による地域課題の解決に着目し、松本市中心市街地の新たな連携の創出について検討してきた。

地域の活性化や地域課題の解決の手法などを紹介するものは多く提案されている。しかし、その大半が、最終的には地区や町会による課題解決を推奨している。しかし、現状は少子高齢化などにより町会の人口が少なく、単一の町会での課題解決が困難であり、これらの提案も実行できる状態ではなかった。こうした町会同士が連携を取り、集合体となることで課題解決能力の強化を目指してきた。

連携を取るためには段階的なアプローチが必要だと考え、地域づくりインターンとして活動に取り組んできた。交流の機会を設けたり、情報の共有を行ったりと様々な取り組みを行ってきた。

今年度の取り組みでは、地域課題に対して実際に解決に向けて動き出したものもある。この背景には、今まで関わることのなかった人たちのつながりが少しずつ生まれた結果である。共通した地域課題や話題に対して、当事者や関係者が集まり、それぞれの本音や現状を共有し合った。共有することで、共通した課題に対してそれぞれがどのように感じているのかを把握することができ、互いのことを知ったことでつながりが生まれた。つながりあうことで、地域課題に対してともに取り組んでいこうという共通意識が芽生え、課題解決に向けて動き出すこととなった。

今年度、取り組みを通して、様々な人々がつながりあうところを見てきた。その中で「今までずっと誤解していた。相手の考えを知ることができてよかった」といった話があった。知らないために双方が相手に対して悪い印象を持っていた、すれ違いを繰り返していた。すれ違っていた双方が結びつくことで、それぞれの立場からできることが明らかになり、課題解決に向けた新たな動きができる。

まずは相手のことを知り、自身のことを相手に知ってもらうことが地域連携に向けた一歩になる。

## 4 次年度へ向けて

今年度、地区や町会間での連携を生み出すための3つのアプローチを立ててそれぞれの活動に取り組んできた。しかし、1-3で論じたような順序だてたアプローチで連携を行うことはできなかった。買い物支援や歴史交流会など単体での行事として行うことはできたが、それぞれの活動がつながることがなく、また次のステップへ進むことがなかったためである。

しかし、順序だてたアプローチとは違う形で、共通する地域課題に対して地区を越えた町会同士・当事者同士が連携を取り解決に向けて動き出す成果がみられた。

こうした成果や考察から、次年度以降の活動を下記のように記した。

### 4-1 共通の話題をキッカケとした交流の場

今年度、地区や町会を越えた新たな交流を目的とし、松本市の歴史を題材として活動に取り組んできた。しかし、町会別でのイベント的な開催になり複数地区、町会合同での開催には至らなかった。

た。ある程度の人間関係がすでに構築されている環境での実施であったため、新たな関係の創出にはならなかった。しかし、学生といった若い世代との交流ができたことが参加者にはとても良い経験だったとみられ、開催当初は「申し訳ない、迷惑をかけてしまう」といった後ろ向きな発言が多く見られた。だが、次第に「次の開催にはまた学生に参加してほしい」「今回参加できなかった友人を次回は誘ってみる」などと前向きな発言が見られるようになった。申し訳ないと感じていたことが体験を通して楽しい、またやりたいといった感情に移り変わっていくことで、自分たちから活動を行うことにつながっていくと感じている。

現状ではまだ、こちらが交流の場をセッティングして参加してもらう形であるが、回を重ねるごとに「またやりたい」といった気持ちを参加者が持ち始めている。この「またやりたい」といった要望をいかにして地域住民の手によって実現させていくかが、来年度以降の大きな課題になってくる。また、歴史を題材にした交流の場は町会や福祉施設など様々な場所で開催されている。こうした既存の場と交流を図り、「一緒にやりたい」といった形に気持ちに向いてもらう方法についても考えていきたい。

#### 4-2 地域課題の把握と共通認識の形成

連携を取るためには地域課題に対して共通認識を持つことが必要であると考え、今年度は様々な取り組みを行ってきた。買い物困難者問題や歴史文化の保存に向けての取り組みでは、その地域課題の当事者では町会長やPTA関係者が自ら声を上げたことが最も注目するポイントであった。自身の抱えている地域課題を自らが発信することで、自分から解決しようとした動きにつながったのではないだろうか。こうして発された声に賛同者が集まり今回のように解決に向けて取り組むことができたと考ええる。

次年度以降は、こうした当事者たちから出された課題解決への方法を絶やさないように継続させていくことを目標とする。買い物支援市ではその利便性や買い物の場の提供により、多くの地域住民から利用されている。一方では、まだまだ地域定着には若干の時間がかかると考えられる。運営に協力してもらえる地域住民が固定化しており、月に一度の開催とはいえ、負担が大きい状態である。また、地域内において「利用したいが足が不

自由で行くことができない」などの声が上がっている。こうした新たに発せられた声に対してどのように周辺住民を巻き込んで取組んで行くのが今後の課題となる。

#### 4-3 情報の共有(課題解決に向けた土台作り)

今年度は地域課題の解決方法の共有ということで、地域の歴史文化の保存に向けて協議を行ってきた。その中で、先進的な取り組みの共有だけではなく、地域課題に対する様々な立場の人の考えについて共有する場となった。こうした情報が共有された結果、今まですれ違っていた当事者間での意思疎通ができ、課題解決に向けた一歩が踏み出せるキッカケが生まれていた。他の地域で取り組まれている事例を取り入れる前に、まずは地域課題に対して各方面がどのように感じているかを共有する場が当事者たちにとって重要なものであった。今回は実際に活動してみるまで、そのことに気付くことができていなかったことが自分自身の反省すべき点であった。

公民館研究集会の分科会という場を活用してもらい、共通する地域課題に対する情報の共有を行った。結果として情報の共有以上に重要である、課題を抱えた当事者同士や各関係者とのつながりが生まれた。

次年度以降、こうしてつながりあった様々な立場の人が自身の立場から見た実践や情報を共有する場として活用していきたい、との声が上がっている。私自身も地域づくりインターンとしての立場から大勢が共通して感じている地域課題に対して情報提供を行ってきたい。

今年度、地域づくりインターンとして松本市の中心市街地の取り組みに関わらせてもらい、中心市街地が抱える様々な地域課題を目の当たりにしてきた。その地域課題の解決に向けて自身はつながりや連携が大切であると感じている。私自身、地域づくりインターンとしての活動を通し、多くの人とつながりや関わりを持つことができた。こうしてできたつながりや関係性を十分に活かすだけではなく、自身も人々つなげる役割を果たし、住民による地域課題の共同解決のキッカケづくりに注力していきたい。







資料3 H30年6月25日 市民タイムス  
「松本神社ようこくあさ市」新聞報道



資料4 ようこくあさ市 アンケート調査結果 まとめ

ようこくあさ市 アンケート調査結果 まとめ

1 開催日：6/24、7/22、8/26、9/16、10/28、11/25 合計6回 開催

2 アンケートに協力いただいた方： 51名

3 アンケート結果

設問1 性別、年齢を教えてください

⇒ 男性9名 女性37名

20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代以上
2名	3名	2名	2名	8名	21名	13名

設問2 住まわれている場所、町会

⇒ 鷹匠町 7名、丸ノ内 16名、大柳町 4名、北馬場 4名、西堀町 1名  
北土井尻 2名、大手 3名、宮崎町 2名、新田町 2名、開智 5名  
笹部 1名、下岡田 1名、渚 1名、その他 2名+α

設問3 誰と一緒に来たか

夫婦で	一人で	家族と	友人と
14名	26名	7名	4名

設問4 ようこくあさ市の開催をどのようにして知ったか

配布されたチラシ	人より聞いた	新聞報道	偶然
34名	9名	2名	4名

設問5 販売されていた商品の値段はどうでしたか

安い	普通	高い
39名	10名	回答者なし

設問6 品物の鮮度はどうでしたか

良い	普通	悪い
45名	3名	回答なし

設問7 販売品目の種類と量はどうか

多い	普通	少ない
15名	26名	7名

設問8 ようこくあさ市の開催時間はどうですか

⇒ 9:00からの開催で妥当・・・43名  
開催時間が遅い・・・2名 (夏季での回答)  
開催時間が早い・・・2名 (冬季での回答)

設問9 ようこく朝市を続けるとした開催頻度はどの程度がいいですか

⇒ 月に1回開催・・・22名  
月に2回開催・・・25名

設問10 購入商品を自宅まで届けてほしいですか

⇒ 特に希望しない・・・32名  
無償でなら希望・・・11名  
有償でなら希望・・・5名